

# 支那佛寺の原始形式

田 中 豊 藏

佛教は印度に起つて、其教法と共に特殊な——スツール窒堵波ガの如き——

宗教的建造物の形式を四方に傳へた。即ち印度全土はいふまでもなく、南錫蘭、爪哇、印度支那にまで行き互つて、各國俗に随つて多少の變形はして居ても、佛寺としては大體同一系統の建築様式が行はれた。然るに北慈嶺を越えて東して支那に入ると、部分的には印度の原型を遺して居ながらも、判然として特異な姿を持つ佛寺建築に逢着する。それは朝鮮に於ても、我邦に於ても亦然り。即ち極東三國を包括して、かの印度式に對立し、支那式佛寺建築と名づくべき一大様式が成立して居るのである。而して其淵源は已に屢々説かれた通り支那古來の宮殿建築にある。即ち支那が佛法の信に入つた時代には、已に支那には獨自の發生を誇る宮殿建築があり、假令外國の新様式が輸入されても、遂にはこの支那本來の宮殿式に改造されずには永く行はれなかつたので、さてこそ佛教藝術の中でも、建築に關する限り、印度と直接の連絡を絶つに至つたのである。茲にも他國產の要素を吸収し、同化して止まない支那文化の特殊な自主的併呑作用が行はれて居るのを觀る。

支那佛寺の原始形式

支那建築の發達の歴史は、文獻備らず、遺物もないから、到底委曲を知ることとは出来ないが、漢魏より六朝への時代のものとしては、山東及四川石闕山東肥城縣、孝堂山の享堂、石堂畫像石、出土の瓦器等を繋ぎ合せて略ぼ其構造様式を察することが出來、之に雲岡、龍門等の石窟に於ける石刻の佛殿、佛塔、天龍山石窟の構造等を參照すれば、部分的に西域の影響を認むべき點もあるが、大體に於て支那獨得の發育をなした木造楣式が世、出世兩種の建築を共通に支配して居ることがわかる。而して更に高勾欄墳墓の壁畫を経て法隆寺建築に想到すれば、此様式が六朝時代には已に或る完成の域に達して居た。即ち我邦に所謂飛鳥様式である。

かく佛寺は宮殿と同一軌道に乗るべき運命を負うて居たとはいへ、佛寺には自ら佛寺にのみ必要な建造物もあり、その構造法をこそ宮殿から學むだに相違なからうが、又別様の配置を取らねばならず、殊に佛教初期にあつては、兎に角目新しい發生であり、一種不思議な外觀を呈したこと、思ふ。余は先づこれから説起す。

佛法が支那に傳つたのは、後漢の初、紀元第一世紀にあつたことはいふまでもない。それに就き、明帝が金人を夢みて佛法を西域に求めたといふ傳説は、今日一般に東洋史學者に否定せられて居るが、余は反對に六朝時代の佛學者流と等しく此の說を認めんとするものである。それは兎も角明帝時代(第一世紀中葉)に已に佛教が或る程度まで支那に行はれて居たことは、例の後漢書楚王英<sup>紀元三十九</sup>傳を引くことによつて常に立證せられて居る。殊にかの傳には「伊蒲塞桑門之盛饌」といふ語もあつて、優婆塞並に沙門、即ち在家出家の受戒者に齋食を施した事も知られる。この「桑門」の字は、それから三十四年後、張衡の西京賦に見えて、その後宮の華麗を述べた末に「展季桑門も誰か能く營はざらん」といふ。展季即ち孔子もその人となり慕ふた柳下惠と併せて桑門を稱したことを以て見ても——そこには多少、渾天儀や、地震計を創製した張衡の好奇癖があるにしても——當時已に佛徒の禁慾精進が一般の語り草となつて居たことも知れ、佛教の流行も察せられるのである。以上必ずしも六朝佛學者の傳説を採用せずとも、支那自體の古典文學から歸納せられ得る事實である。

佛教の傳播は當然經論の翻譯紹介の外に、佛像の渡來、佛寺の經營を約束する。支那に傳つた最初の佛像は、六朝の記述では、優填國傳來の釋迦像の畫像であつたといふ。明帝は直に洛陽に白馬寺を起し、其の寺壁に千乘萬騎塔を繞つて三匝する圖をかゝせたといふ<sup>三寶感通錄(中)所引、南齊王琰、冥祥記</sup>。是等の事實は、全部を其儘に認め難いが、此時始めて佛寺類似のものが支那に營まれたことだけは信じて可からう。

### 眞に尊き「佛法最初」の白馬寺<sup>(註一)</sup>である。

註一。白馬寺建立の事實は、六朝の記載以前に遡ることが出來ず、從つて漢明求法の傳説を潤色するために作られた種々なる説話の一であると疑へば疑ひ得られる。然し後漢書記載の範圍に於て漢明求法の傳説を是認する余は、爾來引續いて存續する白馬寺の基礎が或は明帝によつて置かれたのかと考へたい。此が更に増大せられて白馬寺の名が與へられたことや、或は「千乘萬騎繞塔三匝」の壁畫が畫かれたことは、或は明帝より遙か後にあつたことも知れない。六朝の佛學者は、其傳聞する所を、或は目撃する所を、直に明帝に係けて、この震旦の阿育王の名譽を記念したのであらう。高僧傳(一)攝摩騰傳には、白馬寺の名を出さず、單に明帝が洛陽城西門外に於て「精舍」を立て、摩騰を置いたことを言ひ、末に至つて「騰の住せし處は今洛陽城西雍門外の白馬寺是也」とことわつて居るを見ても、その間の消息は察せられる。(此意已に東洋學報第一〇卷常盤大定氏「漢明求法説の研究」、同第一卷、大谷勝真氏「支那に於ける佛寺建立の起源に就て」に於て述べられた)。「白馬」を以て寺に名くる實例としては、大谷君に據れば晉初まで遡り得といふ。其由來に就ては古來二説あり、一は白馬悲鳴の故事(梁高僧傳一)、一は白馬負經の故事(魏書一一四、釋老志)に基くといはれるが、之に對し常盤氏は悉陀太子の白馬難陟<sup>ナニシフ</sup>の德を記念するために名づけられたといふ新説を出され、大谷君は佛老抗争の意を含めて、之を老子青牛に對する白馬と解釋し、兼ねて西方を現すものであるとて、西洋學者らしい口氣を洩して居られる。且つ原始時代の支那の寺名は、皆、東寺、西寺、中寺、建初寺、官佛圖精舍、五教寺、五重寺の如く極めて通俗的な名稱で、白馬寺といふ如き文學的な響を持つものは、古くはあり得ないといふことに諸學者の説は一致して居る。余は白馬寺名の起源に關しては半ば常盤説に左祖して更に一別見を提唱する。白馬寺は勿論太子の白馬の故事に基くのであるが、それが寺名となつたのは、太子が白馬に別れる光景を現した彫刻(又は畫像)が寺門にあつたからではなからうか。その實例は現に雲岡石窟第六洞上方拱窓にある。即ち半跏思惟せる太子の前に別を惜むで白馬はぬかづく。この鹽原多助式構圖は其儘のものが健陀羅に求められる(其一例 Foucher, L'art gréco-bouddhique du Gandhāra, I, Fig. 185)。かくて寺門に此像を見た時人は、故事來歴を尋ねるまでもなく、そこに白馬の像あるを見て、取敢へず「白馬寺」と名けたのかと思はれるのである。即ち雲岡第六洞は又「雲岡の白馬寺」とも云へる。かく解釋すれば、「白馬寺」は決して文學的な

命名どころか、甚だ平凡な通稱となるのである。

白馬寺のことは兎も角として、之に續いて漢末に吳の笮融<sup>サク</sup>が佛寺を建てた記事を読むに至つて、支那佛教原始時代の佛寺の輪廓が餘程明になつて来る。即ち三國志<sup>吳志</sup>劉繇傳に

笮融丹陽人。……大起浮圖祠。以銅爲人。黃金塗身。衣以錦采。垂銅槃九重。下爲重樓。閣道可容三千餘人。悉課讀佛經。令下界內及旁郡人有好佛者聽受道。復其他役以招致之。由此遠近前後至者五千餘人。戶每浴佛。多設酒飯。布席於路。經數十里。民人來觀及競食且萬人。費以巨億計。といふもの即ち是れで、同じ事が後漢書<sup>三</sup>陶謙傳に、稍節略された形で、更に了解し易く記されて居る。

(笮融)大起浮屠寺。<sup>註、浮屠佛也</sup>上累金盤。下爲重樓。又堂閣周回可容三千許人。作黃金塗像。衣以錦綵。每浴佛輒多設飲飯。布席於路。其有就食及觀者且萬餘人。

即ちこゝでは九重の銅盤を戴きたる重樓を建て、その中には本尊たる金銅佛像を安置し、周圍に多人數を收容すべき閣道を造つたのである。何と九輪を擧げた塔婆を中心にして、四方に僧房を兼ねたる軒廊の繞らされた一個の佛寺が現出したではないか。佛祖統記には此事實を——多分資治通鑑を誤讀して——後漢獻帝興平二年(紀元一九五)に係けて居るが、大谷君の考證によれば、中平六年(紀元一八九)から初平四年(一九三)までの間の事であるといふ<sup>東洋學報一卷、大谷勝真氏「支那に於ける佛寺造立の起源に就て」</sup>

此事は更に三寶感通錄上記する所の魏の明帝の官佛圖精舍の本體

支那佛寺の原始形式

を明にする。

魏明帝洛城中、本有三寺。其一在宮之西。每槃幡刹頭。輒斥見宮內。帝患之。將毀除壞。時外國沙門居寺。乃齎金盤盛水以貯舍利。五色光明騰焰不息。帝歎曰。非夫神效。安得爾乎。乃於道東造周閣百間。名爲官佛圖精舍云。

<sup>魏書釋老志、又此事を載せて少しく異傳あり</sup>

と即ち宮内を斥<sup>さし</sup>見るることによつて高層建築なることが知れ、刹頭に高く幡を掲ぐるは、雲岡石窟などの石刻圖の塔婆から、その古き形式なりしことがわかる。それに更に百間の周閣を造つたといふから、愈前記笮融の浮圖祠と同様式であつたと解釋される。

當時支那の典籍には汎く佛像を安置した處、即ち禮拜堂を「祠」と呼び、「浮屠之仁祠」など稱した。それは神靈の所在地だからである。三國志では、前記のやうな特別な建物を「浮圖祠」と呼んで居る。續いて其後に編纂された後漢書では之を「浮屠寺」と書替へて居る。言ふ迄もなく浮圖又は浮屠は「佛」字の用未だ現はれざる以前の Buddha の音譯で、佛經を支那の古史に「浮屠經」といふと同じく、「浮屠(圖)寺」といへば、即ち「佛陀寺」「佛寺」といふと同じ事である。茲に問題になるのは「寺」の字が「祠」の字に代つた事である。元來「寺」とは官署の名で、漢の官制では三公の下に九卿があり、三公の居る所を府といひ、九卿の居る所を寺といつたといふ<sup>左氏隱公七年傳疏</sup>この「九寺」の名は前後漢書の百官志には徴せられないが、晋初の荀勗<sup>二八九</sup>の奏議には、明に「九寺」の文字が見えて

居るから晉書漢末か魏晉の交に始つたものと見える。兩漢時代では必ずしも九卿の府署に限らず、廣く一般に官署を寺といつたらしい。文選五吳都賦「列寺七里」の李善注に

應劭風俗通曰。今尙書御史謁者所止皆曰寺。今本風俗通、此文なし

後漢書四和帝永元六年紀「幸洛陽寺」の章懷太子注に

寺官舍也。風俗通云。寺嗣也。理事之吏嗣續於其中。今本風俗通、又此文なく、

此文は載せて劉熙釋名(五)に在る

説文三寸部

寺廷也。有法度一者也。

其他漢書九元帝初元二年紀「城郭官寺」の顏師古注に「凡そ府廷の在る

所、皆之を寺と謂ふ」とあるのは、此意を受けたものである。更に

廣く前後漢書に於ける寺の用例を見るに、

鄭躬等攻官寺纂囚徒。前漢書(一〇)成帝(鴻嘉三年)紀

永元六年七月幸洛陽寺錄囚徒。舉冤獄。後漢書(四)和帝紀

永初二年五月皇太后幸洛陽寺及若盧獄錄囚徒。後漢書(五)安帝紀

永初六年五月皇太后幸洛陽寺錄囚徒。同上

等にて推察し得らるゝ如く、「寺」は、獄舎を指すものゝやうである。

こゝに所謂「洛陽寺」が洛陽の白馬寺ではなくして、牢獄であるな

ど、誠に皮肉の至である。要するに説文に簡單に「寺は廷なり」と

いひ、「寸」の字に「法度」の意を含めて府廷の義に解釋したのは、

最も當を得て居るので、即ち外郭に圍まれて、廷即ち中庭の設けら

れた處を廣く「寺」と稱したのである。牢獄を「寺」といふのも、

恐くそれから來たのであらう。かく考へると、佛寺の意味の「寺」

も自ら同様に解釋されるので、古き「祠」字がいつの間にやら「寺」字に代つたのは、佛寺の構造が府廷と同じく中庭を持つて居たからであらう。(註二)

註二。「寺」の字を佛寺の意味に代用したことに就ては、已に舊説がある。即ち僧史

略に據るに後漢明帝の時、西域僧來つて鴻臚寺に館した、後に別居に移つたが、そ

の本を忘れず、借り名けて「寺」といつたといふのである。此説は已に唐の舒元興

撰、鄂州永興縣重巖寺碑銘序(唐文粹六五)、並に廣韻等に見えて、通説とはなつ

て居るが、漢の時「鴻臚寺」と連稱した例を未だ見ず、恐く後世の附會であらう。

猶ほ因に「寺」の字を以て道觀を呼ぶだ珍しい例を挙げる。即ち魏の王璩(二五二年卒)が廣川長岑文瑜に與ふる書(文選四二)に「土龍は首を玄寺に矯ぐ」とあるの

がそれで、李善注に「玄寺とは道場也。風俗通に曰く、尙書御史の止る所、皆寺といふと。故に後代道場及び祠宇、皆其稱を取る」と。要するに當代はまだ寺字に定

つた使用法とてもなかつたのである。

魏晉時代から引續いて、佛寺を又精舍と呼ぶ前記、魏明帝、官佛圖精舍。晉書(九)孝武帝(太元六年)

等紀精舍とは、後漢時代の私塾の稱で、それを借用したのであらう。(註三)

註三。後漢書(九七)黨錮傳「劉淑、隱居立精舍講授諸生。」又(一〇九下)包咸傳「咸住東海立精舍講授。」

そは兎もあれ、支那に於ける原始佛寺の形式は、中心に木造の數

重の塔婆を建て、周圍に閣道を造つて僧衆の住所に宛てたものだつ

たのである。この塔婆建立の動機は、竿融の場合では佛像安置のた

めであつたが、それは草創時代、塔婆に對する理解を缺いた、めの

異例であつて、後には矢張り印度本來の風習に歸り、佛舍利貯藏の

ためのものとなるのである。

溯つて西天印度に於ける原始時代の佛寺、即ち僧伽藍の制を尋ぬ

るに、それは必ず佛舍利、爪髮の類を貯藏する卒塔婆スッタパ、即ち塔婆

に、それは必ず佛舍利、爪髮の類を貯藏する卒塔婆、即ち塔婆



―基壇と覆鉢と刹柱とより成る支那に所謂覆盆浮圖<sup>(註四)</sup>―を營むで禮拜の目標とし、附近隨處に僧衆の住房を作り、其間の廣庭を布薩の道場としたものであつたらしい。要するに佛寺としての特別な建物は、唯だ覆盆浮圖あるのみであつた。誠に遺物崇拜の廣く行はれて居た時代にあつては、是れ以上の施設とはあり得なかつた。次に稍々時代降つて現に印度西南海岸地方に多數に遺存する紀元前後の石窟寺を見るに、それは馬蹄形のプランを有ち、奥に卒堵波を掘り残した支提<sup>チャイトヤ</sup>と、方形のプランの、がら<sup>ガ</sup>ら<sup>ラ</sup>の毘訶羅<sup>ヴィハハラ</sup>とより成る。矢張り佛寺の核心は卒堵波にあるので、未だ偶像を容れる餘地を遺さなかつた。その偶像を安置する殿堂の現はれたのは、遺物の上では健陀羅の佛寺より始まる。

註四。この覆盆浮圖の形は、其まゝでは支那に傳はらなかつたが、支那で「阿育王塔」と稱するのは、六朝の石刻で見ると、本尊佛を納めた方形の塔身に、大きな覆鉢を持つ屋蓋を冠せ、屋蓋の四隅に一種の突起を作つた塔（其一例、雲岡石窟第十四洞、支那佛教史蹟二ノ三九ノ一）を稱したものらしく、かの木造數重の――支那日本通行の形なる故に、以後之を支那式塔婆と呼ぶ――塔婆に比して、「覆盆」の意味が特に著しい。余は此覆盆式のもののかの支那式のものより時代後れて支那に傳つたものと思ふ。

余は紀元第一世紀の支那に於ける俄然たる佛法興隆を、西域交通路の開けたことに源由せしむるは無論であるが、更に之を直接に大月氏國貴霜朝に於ける教法宣揚に因縁づけざるを得ない。抑も北天の地は夙に佛法の廣布を見、紀元前第二世紀には此地方に占據せる希臘王彌蘭<sup>ミラン</sup>が佛道を問ふあり、頓て第二の阿育王として現世の轉輪

支那佛寺の原始形式

王たる迦膩色迦王が月氏國に君臨するや、頻に武威を輝かして北天全土は固より、遠く葱嶺を越えて于闐國をも其治下に伏せしめ、一大帝國を建設すると共に、又厚く佛法を庇護した。恐く阿育の如く、傳道の教使を四方に派遣したかも知れない。そは兎も角此鬱勃たる佛教の氣運は遂に東方支那に進路を求めざるを得なかつた。已に支那に於ける最古の佛法に關する記録が、前漢末、元壽元年（紀元前二年）に支那の一官吏が大月氏王使から浮屠（佛）經の口授を受けたといふにあるではないか。爾來佛法傳播の徑路は能くわからず、又先後の別もあり得るが、兎も角地理的に見て、月氏國賓から安息、康居、于闐、疏勒、龜茲などと傳つて、支那に到達したものであることは、其後相繼で支那に來た西域沙門の生國を調べれば略ぼ疑ないことである。而して當時支那の佛法は、月氏の本據から直接に輸入された場合も勿論あり得るし、僧傳には天竺沙門の來朝をも傳へて居るが、多くは以東の中間國から傳へて波及したもの、如くである。この事は魏の朱士行が經を求めて西遊した時でさへ、漸く于闐國に辿り着いたに過ぎず、支那僧の入竺は更に百年以上後れて法顯の出世を待たねばならなかつたことでも、略ぼ察せられる。

迦膩色迦時代の大月氏國は廣大なものであつたらしいが、その中心は今西北國境地方で、即ち古の健陀羅<sup>ガンダーラ</sup>であり、茲には希臘羅馬<sup>ギリシヤ・ローマ</sup>の殖民地美術の影響を多分に受けた佛教美術、即ち所謂健陀羅美術が繁昌した。其高潮期が何時にあるや、學者によつて異論はあるが、それが印度から支那への中間國に傳播したのは、迦膩色迦の政治的權力と關係があらう。この古い漢魏時代の中間國の文化狀態に就て

は、何人も明言し得るものはないが、後代の出土品によつて推定すると、是等中間國には夙に健陀羅系の佛教文化に、多分の伊蘭系の世俗文化を混入したものが行はれて居たらしい。この種の美術の更に東漸したものが、支那に於ける現存最古の佛教美術たる六朝佛の大部を成して居ることは、何人も疑はぬであらう。

かく考へて來ると、支那に於ける原始の佛教美術はどうしても健陀羅系統のものであらねばならぬ。前に已に述べたやうに、漢の明帝の時、支那に齎らされた支那最初の佛像（フシヤ）は、中天竺の一國王優填（ウツタ）の釋迦像を寫した畫本であつたといふ。そういう傳稱をもつ像が傳摸を経て支那に渡るといふことも、絶無の例とは云へないが、是は後世に仕組まれた物語らしく、あまり信を措くに足りない。この時の佛像（フシヤ）は恐く矢張り健陀羅若しくは一層近い國から來たらうし、或はそれが優填釋迦像といふものゝ／＼しい觸込であつたかも知れない。明瞭に健陀羅系統を示す我が嵯峨の釋迦像でさへ、猶ほ且つ優填像の第三傳本と傳へられて居る位であるから。

かゝる古い時代の佛像の様式を推定すべき文獻は他にないが、之を後代の北魏の造像に觀ても、それが全く健陀羅摩儉（マキヤ）羅系統のもので、當時全盛の中天笈多様式（グプタ）がまだ現はれて居ないといふ事實から推して、略ぼ其源流を察し得られる。若し夫れ寺院の形式に於ては、之を健陀羅並に中間諸國の制度に負ふ所多しと謂ふべきである。かの印度佛教原始の覆盆浮圖の形式は其儘には支那に傳らず、支那に行はれた塔婆は、恐く健陀羅地方に發生した木造の高層建築であつ

た。元來印度本來の覆盆浮圖は其覆盆（即ち覆鉢）部が半球形をなし、健陀羅のは概して高く延びて砲彈形（注五）を示す。于闐、疏勒、庫車、吐魯蕃、樓蘭等の佛教遺蹟に現存する古塔に、この健陀羅式砲彈形の孤立するものが甚だ多い。此塔身の延びるといふことが、已に後に支那に於て高層建築となるべき第一歩であるが、其最初の、且つ完全なる實現が早く迦膩色迦王によつて試みられて居る。即ち王が都城の東南に建てた雀離浮圖がそれであり、木造十三重、上に鐵柱を立て、金盤十三を重ねたものであつたといふ（洛陽伽藍記五）。支那の木造重層塔が大體に於て此模倣であることは、十分推察される。而かも之を模倣するに際しては、支那在來の樓閣建築の構架法を應用して、自國風に翻譯することを忘れなかつた。茲にあの特種な建築形式が出来あがつたのである。即ち魏書（四）一釋老志に

凡宮塔制度。猶依三（三）天竺舊狀（三）而重（三）構之。從一級（一）至三五七九（九）。世人相承。謂之浮圖。或云佛圖。（註六）

といふものは是である。而して竿融の佛寺は其原始の形であり、やがて長安の五級寺、江夏の五層塔、長干寺の三層浮圖等となり、晋の世には洛陽に浮圖四十二所あつたといふ（魏書釋老志）。其制式の明記せられたものに北魏洛陽永寧寺の九層塔（洛陽伽藍記一）があり、之を雲岡石窟の石刻に照して、六朝時代には略ぼ後世の重層塔の完成せられたことを知り得るであらう。かくて此形式の起源は健陀羅にあるとして、最も怪むべきは、法顯以下の支那沙門の遊方記の類を見ても、一も中間の中亞諸國に此種の塔あるを記載しないことであるが、畢竟は、木造重層塔は假令存在しても、特に大規模のものならぬ限、目慣れ

た支那沙門は之を特記せず、而してそれ等は木造の故に夙く亡滅に歸したと考ふる外はない。たゞ吐魯蕃地方に多數に遺存して居て、英獨の探險家が terraced shrine, Stufenpyramide, Stupafelder, Pfeilerempel など、呼んで居る塔の建築の高層建築がある。是は確に雲岡石窟第二十九洞中の大塔等と同系統のものらしい。唯だ雲岡のは石刻で木造を摸せるに反し、吐魯蕃のは塔造の手法で一貫して居る。さて是等遺物の中、高昌故城 (Idykutschari) の東方 Syrkip にある最も著しいものとして Klementz, Turan und seine Alterthümer (Nachrichten über die von der kais. Akad. der Wissen. zu St. Petersburg, im Jahre 1868 ausgerüstete Expedition nach Turan I.) s. 30—31. 故城の北 Astana Stein, Innermost Asia, II. p. 613. Figs. 316—317. Ibid. III. Pl. 28. があるもの Grünwedel, Bericht über archäologische Arbeit in Idykutschari, s. 50. Tempel Y Ibid. s. 49 Tempel Gamma s. 96. 等皆此類である。而してクレメンツは Syrkip のものを佛陀伽耶大菩提寺の模造の一例と観て居る。固より假定の説であるが、様式はよく似て居り、何等かの関係あるを思はせる。要するに此種の古いものが雲岡洞中の塔の原型となつたことは疑なからう。是が雀離浮圖とどう關係するかわからぬが、その覆盆浮圖とは全く懸離れて高層建築たる意圖は相同しく、即ち是も亦雀離浮圖の如きものから出發して變化したものでないかとも想像され、やがては吐魯蕃地方に此種の遺構の多いことから、かの梁高僧傳<sup>一</sup>鳩摩羅什傳に見ゆる龜茲國の雀梨大寺のこととも思合されるのである。

註五。此塔身の延長するといふことは果して健陀羅に起源するものかどうか明でない。法華經、見寶塔品に所謂寶塔は高五百由旬、縱横二百五十由旬で、扉があり、中に多寶如來の全身舍利を藏するといふから、最早原始の覆盆式のものとは思はれぬ。印度内地現存の實例を見ても時代後るゝものは塔身の延びる傾向を有する。アジャ

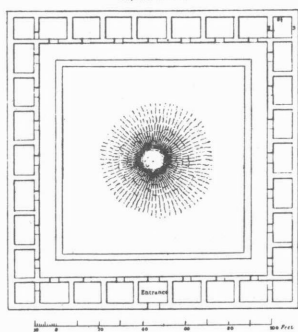
支那佛寺の原始形式

ンタ、エローラの佛教洞窟内にある塔の如き皆然り。更にそれが高層建築的に發展したものが、鹿野苑の Dhamek 塔、佛陀伽耶の大菩提寺であり、是になると又印度教特有の丈高き神殿とも意圖の上に互に影響する所がありそうである。

註六。「浮屠」浮圖何れも元來 Buddha の對音であつた。然るに後に塔婆が現れるに至て stupa の轉訛音をでも聞いたのか、又「浮屠」浮圖「佛圖」蒲圖等の字を以て之に當てた。是に於て「浮屠」浮圖の二語に就ては、兩義全く混同し、その何れでも或時は佛を意味し、或時は塔婆を意味し得ることゝなつた。

さてかくの如くにして出來た塔婆を中心とする支那佛寺の最初の形式は、若し其塔婆に佛舍利貯藏の正しい意味が盛らるゝならば、其外觀こそ全く異れ、猶是れ印度原始佛教時代の意圖の延長である。

第一圖 バール、クハナ佛寺遺蹟



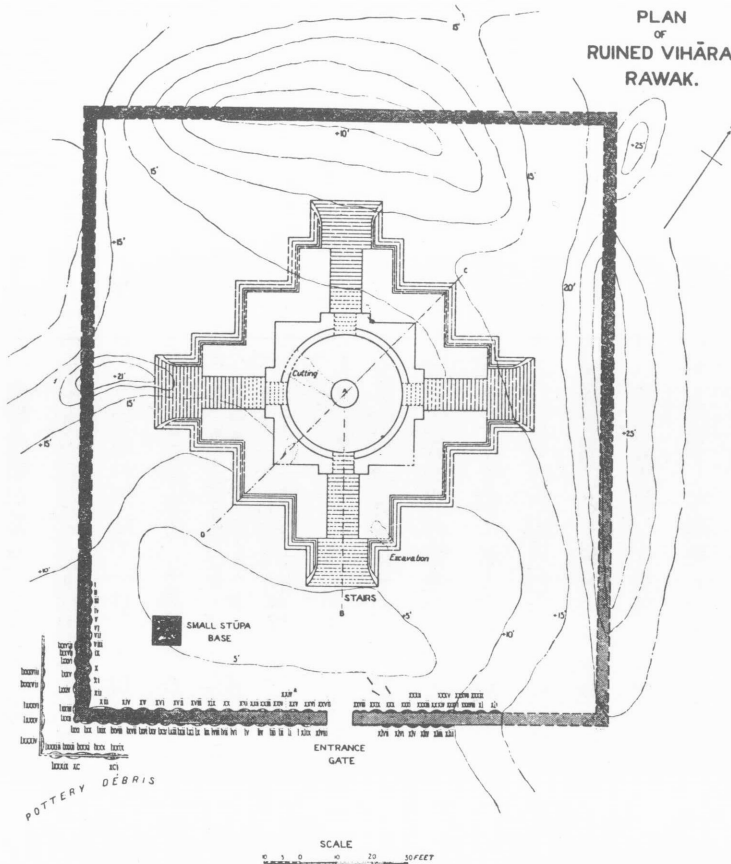
而して此高き塔婆を中心として閣道を繞らし、廣い中庭を作る、即ち所謂「寺」の形式は、已に塔婆を中央に置く以上は、支那の建築家の胸中に自然に發生し得るものでもあらうが、余は又不思議にも其先

蹤を健陀羅の遺跡の中に見出すのである。

健陀羅研究の權威たる フーシェ氏に従へば、健陀羅の佛寺は、卒堵波と僧伽藍<sup>フーシェ氏は之を僧院の義に用ふ</sup>との二元組織より成り、健陀羅の平原並にカーブルの溪谷にて最も屢々見受くる例は卒堵波と僧伽藍とを並列せしめ (procédé par juxtaposition)、且つ成るべく兩者を左右相稱に置かんとする傾向あるもの——Swat 溪谷の Top-Darra は其一例——であるが、又別に古くから挿入法 (procédé par insertion) と呼ぶ

べき形式もあつて、僧房を以て卒堵波を圍み、方形の中庭を作るのである。タキシラ Shah-Dheri の Bābar-khāna という所に其一例がある(第一圖参照)。此プランはカシュミールの寺院と一致する。恐く健陀羅の影響を受けたのであらうといふのである。Foucher, L'art gréco-bouddhique du Gandhāra, I. pp.154—156. Cunningham, Archaeological Survey of India, V. pp. 74—75.

第二圖 ラワク 佛寺遺蹟



り圍み、中庭の中央に神殿を置いたプランは正しく健陀羅の挿入式と一致する Archaeological Survey of India, Kashmir. そこでフ氏は地理的隣接から考へて、之を健陀羅影響と見たのである。然らば支那の最初の佛寺のプランは、年代も遙に古いし、これこそ此形式の正しい推移と見ることは出来ないだらうか。

いふまでもなく健陀羅の例は、今日遺跡の示す限、所謂「挿入法」の場合と雖も、常に覆盆浮圖を僧院を以て圍むたものであつて、未だ支那式重層塔のやうなものが僧院の中に建てられた事實を發見し得ない。然し已に雀離浮圖の如き木造重層塔が營まれたことがありとすれば、往時は之を繞つて僧院を造る場合も隨分あつたことと思ふ。又その方が卒堵波に敬意を表し、且つ之を保護する意味にもなる。

さらば健陀羅から支那への中間諸國の佛寺を伺はう。就中スタイン氏の報告した和闐(コータン)の北東なる Rawak Vihāra で、これは實に中心に一個の覆盆浮圖を築き、周圍に歩廊の如きものを繞らした完全な健陀羅式佛寺である(第二圖) Stein, Ancient Khotan, I. pp. 484—501. Ibid. II. Pl. 12. 塔も廊も共に磚造、廊の内外を佛の泥像を以て飾つて居り、その佛像は典刑的な健陀羅摩偷羅式の手法を示して居る。更に東して吐魯蕃地方、高昌の故國へ行くと、ある意味に於て一層支那式に近いものに逢着する。前記のグリーンエーデルの所謂

Tempel Gamma 又は Tempel Wschari, s. 46. Grünwedel, Idyktu-の如き、其一例で、

フ氏の謂ふカシュミールの寺院は、有名な Martand の日天祠を始め、何れも印度教系統のもので、純粹なる佛寺でなく、年代も第五、六世紀まで下るといはれて居るが、方形の地域を柱廊を以て取

前述の如き重層の「塔柱」(Stupa-fleier)を牆壁を以て圍むのである。勿論是等の遺物は、時代遙に下るもので、Rawakの遺蹟でさへ六朝

早期を上り得ないやうに思はれるから、以て漢魏時代の支那佛寺を論ずる材料とするには足りないやうであるが、余は矢張此歩廊を以て塔婆を圍むといふ「挿入法」は健陀羅に發して支那に傳つたもの、様に想像する。其の傳來の途中に遺した足跡が于闐、吐魯蕃などに窺はれるのである。猶ほ此種の事實が中亞諸國並に支那本土に於ける將來の發掘を待つて一層明にさるべきは勿論である。

註七。

吐魯蕃地方に多數に存する佛寺の例では、是等の塔柱は左程巨大なものなく、從つて四壁から圓天井を構へて之を掩ひ、周圍を廻廊とし、前方に前室をしつらへて、塔柱を禮拜の中心とするのである。(其一例、グリーンエーデルの所謂 Tempel Beta, cf. Idykcuschari, S. 73-79)。かく塔柱が屋内の構造になれば、恰も石窟寺の形に歸つたことになり、又事實之を石窟に試みた例もある。茲に又支那石窟寺中の一類、中央に佛像柱を掘り残したものと、ある程度の共通性を持つ。猶ほ此種の塔柱が更に縮少すれば、支那に所謂四面像となり、幢像となる。

かくて余は遂に漢魏時代の支那の佛寺の形式が、他の佛教藝術と共に、其淵源を健陀羅並に其影響を受けた中亞諸國に仰いで居るといふ事實に想到せざるを得ないのである。然しながらそれは前にも述べた如く、要するに堂宇配置の上の問題であつて、個々の建造物の構造様式は飽くまで支那本來の手法を踏襲したものであつたに相違ない。是が謂ふ所の支那佛寺の原始形式であり、又支那佛寺發達の第一期である。

専ら遺物崇拜の行はれた時代にあつては、佛舍利を貯藏する一基の塔婆と僧衆の住所とがあれば足りた。佛教が支那に傳つた頃には、健陀羅では遺物崇拜の外に、盛に偶像崇拜が行はれ、隨てこの二様

支那佛寺の原始形式

の崇拜の方式が同時に支那に傳つた。(それは又中亞諸國に於ても同じ狀勢であつたらう)。後漢書<sup>八一</sup>西域傳記載の明帝の夢見や、「遂に中國に於て形像を圖畫す」といふ文句や、楚王、桓帝の禮佛の記事を讀めば、それが全く偶像崇拜であることがわかる。竿融が折角塔婆を建てながら、舍利を用ひずして黄金佛を安置し、浴佛の儀式を行つたといふ如き、中間國の雜種な禮拜の方式を好い加減に聞傳へて實行した狀勢が察しられる。而かも他方に西域沙門の相尋いで東來によつて、佛教に對する知識が深まると共に、舍利崇拜が唱道せられた。魏の明帝の官佛圖精舍<sup>前に已に引く</sup>、吳の孫權の建初寺<sup>梁高僧傳一</sup>の場合等、何れも舍利的功德を語るもので、共に紀元第三世紀前半に屬し、其以後無數の同種の例が擧げられる。かくて舍利貯藏のためといふ塔婆建立の正しい目的は漸く理解せらるゝに至つた。所が一方佛教は次第に偶像教化する傾向にある。最初は西域より佛像を傳へたが、頓て支那にて模製することとなり、東晉の戴逵の如きは、最も造像の名手として西域の様式以外に一家の軌軸を出した位である。かくて新に將來せられ、又製作される佛像は、塔婆の外に別に堂宇を造つて安置する外なかつた。

此例はまた健陀羅にもあつた。フーシェ氏はいふ、僧院 (convent) は多數の僧衆の外、偶像で滿され、而かも其偶像は新しい寄進によつて次第に増加して、僧房 (cellule) から僧衆を驅逐するに至るから、僧衆は別に其傍に自己の住房を建てる必要が起り、其住房は自ら從前の僧院と同じく方形の地域を取ることに、なり、其結果吾人の所謂並列法と挿入法とを結合した第三の方式が生じるとして、Shahr-i-Bah-



101 遺蹟の例をあげ、此手續を反覆して方形地域の數は益々殖え、遂に那爛陀寺の如きものが出來あがるといひ Foucher, Gandhāra, I. pp. 150—158. 更に

Takht-i-Bahai や Jamāl-Garhi の如き丘陵上の寺院の複雑なプランは、やゝ事情を異にするが、畢竟前記の方式の發展に外ならぬことを暗示して居る Ibid., pp. 158 sqq. Cunningham, Archaeological Survey, V. pp. 26 sqq. (Takht-i-Bahai), pp. 46 sqq. (Jamāl-Garhi).

かくて塔婆の外に佛殿の現はれる過程はよく説明されるが、健陀羅の遺例では、個々の佛堂(chapelle)が多數に出來るのであつて、特に主要な尊像を一堂に集めて禮拜の中心とするやうなことはない。印度内地でも佛教が偶像教化すると共に同じ現象が起つたことが理解されるが、余は特に健陀羅に次ぐ摩偷羅の時代、鹿野苑の時代の佛寺に就て知る所なきを遺憾とする。そこで又しても支那への中閩國の一例であるが、法顯傳「于闐國の條に

其城西七八里有僧伽藍一名王新寺。作來八十年經三王二方成。

可高二十五丈。雕文刻鏤。金銀覆上。衆寶合成。塔後作佛堂。

莊嚴妙好。梁柱戶扇窓牖皆以金薄。別作僧房。亦嚴麗整飾非

言可盡。

とあるを挙げやう。善美を盡した木造の大伽藍である。佛像安置の必要から、「塔の後に佛堂を作る」に至つたのであるが、この事は特に後述の永寧寺のプランと思ひ合せて興味を引くのである。而して是は法顯の在國より八十年前といへば、第四世紀の始である。

抑も舍利を貯藏する塔婆の外に、専ら偶像を安置する堂宇の必要となることは偶像崇拜の盛行する自然の結果でもあるが、恰も西域に此新方式の行はれるにつれて、支那の佛寺にも新しく所謂「佛殿」

なるものが出來、而かもその佛殿は、必ず個々孤立的に堂宇を構へるといふ支那宮殿の一般性に從つて考案せられて居るから、極めて明確なる輪廓を以て、塔婆と共に佛寺の最も主要なる位置を占めることとなつた。即ち塔と佛殿との二元的配置である。正しく我が飛鳥時代の塔金堂に當るので、それは佛殿が朝鮮で「金堂」と名けられて、我邦に入つたからである。而して此場合、佛殿には任意の佛像を置き得るが、塔婆には、佛舍利を中心として考へて、像設を行ふにしても、必ず佛傳から主題を選ぶを法則とする。

ところで支那の佛寺も此時代になると、假令形式の遠い淵源は西域地方にあらうとも、最早完全に支那式に構案せられ、西域諸寺とは似ても似つかぬものとなつた。即ち塔婆は——古來の支那建築になかつた一構造であるが——支那式重層建築の形に完成せられ、之に對して佛殿は、全く古の路寢、即ち支那宮室の正殿を摸し、この佛寺として必要缺くべからざる二個の建造物を南北の正中線に措き、僧房其他の堂宇を配し、周圍に外廊を繞らし、天の四方に配して諸門を開き、王者の理想に隨つて、南を正門として全伽藍を南面せしめるのである。即ち名は佛寺であるけれども、實は支那古來の宮殿の變形たるに過ぎなくなつた。此規模の大略を窺ふべきもの、即ち北魏洛陽に建立された永寧寺の伽藍である。洛陽伽藍記一は語る。

永寧寺。熙平元年(五一六年)靈太后胡氏所立也。……中有九

層浮圖一所。架木爲之。舉高九十丈。有刹復高十丈。合去

地一千尺。去京師二百里。已遙見之。……刹上有金寶瓶。容

二十五石。寶瓶下有承露金盤三十重。周匝皆垂金鐸。復有鐵



鎖四道<sup>二</sup>引<sup>レ</sup>刹向<sup>二</sup>浮圖四角<sup>一</sup>。鎖上亦有<sup>二</sup>金鐸<sup>一</sup>。鐸大小如<sup>二</sup>一石瓮子<sup>一</sup>。浮圖有<sup>二</sup>九級角<sup>一</sup>。角皆懸<sup>二</sup>金鐸<sup>一</sup>。合<sup>二</sup>上下<sup>一</sup>有<sup>二</sup>一百二十鐸<sup>一</sup>。浮圖有<sup>二</sup>四面<sup>一</sup>。面有<sup>二</sup>三戸六窓<sup>一</sup>。戸皆朱漆。扉上有<sup>二</sup>五行金釘<sup>一</sup>。合有<sup>二</sup>五千四百枚<sup>一</sup>。復有<sup>二</sup>金環鋪首<sup>一</sup>。

とて、行文に甚しく誇張の痕はあるが、大體に於て我が法隆寺以下の諸建築を思はせる。次に伽藍記は極めて重要な提言をなした。曰く、

浮圖北有<sup>二</sup>佛殿一所<sup>一</sup>。形如<sup>二</sup>太極殿<sup>一</sup>。中有<sup>二</sup>丈八<sup>一</sup>。吳若準集證云、八字當是六字之訛。金象一軀。中長<sup>誤脱あるか</sup>金象十軀。繡珠象三軀。織成五軀。作功奇巧冠<sup>二</sup>於當世<sup>一</sup>。僧房樓觀一千餘間。彫梁紛壁。青鎖綺疏。難<sup>二</sup>得而言<sup>一</sup>。

次に外廓に及むで

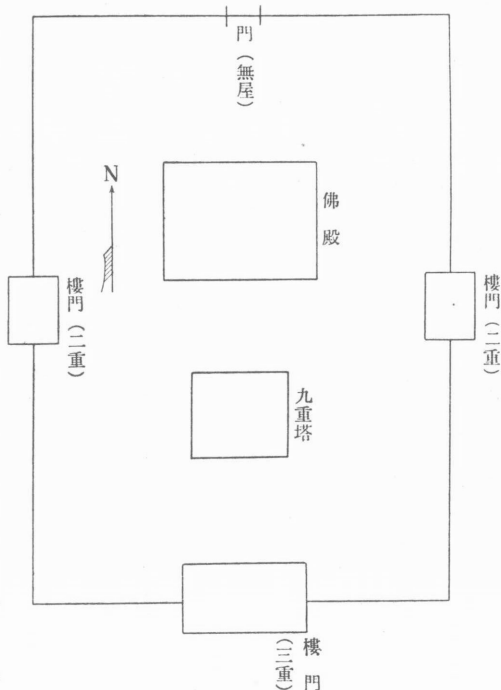
寺院牆。皆施<sup>二</sup>短椽<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>瓦覆<sup>レ</sup>之。若<sup>二</sup>今宮牆<sup>一</sup>也。四面各開<sup>二</sup>一門<sup>一</sup>。南門。樓三重通<sup>二</sup>三道<sup>一</sup>。去地二十丈。形製似<sup>二</sup>今端門<sup>一</sup>。……東西兩門皆亦如<sup>レ</sup>之。所<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>異者惟樓二重。北門一道不<sup>レ</sup>施<sup>レ</sup>屋。似<sup>二</sup>烏頭門<sup>一</sup>。

と述べて居る。即ちこの記載にあるだけの建造物を圖示すれば大要第三圖の如きものとなる。

右の圖に更に伽藍記の命する通り、僧房樓觀を加ふべきは勿論である。此の佛寺の南面することは、支那では恐く最初からそうであつたらうと思はれるが、伽藍記によつて始めて其事實が徴される。是は固より佛寺東面を常とする印度の習慣に對しての大改革である(註八)が、却て極東三國の間では是が法則となつた。次に浮圖の北方に當

支那佛寺の原始形式

る佛殿一所とは、即ち丈六金像以下の諸佛を安置する、朝鮮並に我邦で稱ふる所の金堂たることは言ふまでもなく、見來れば講堂及び廡廊に關する記載こそなければ、塔金堂を前後一直線上に配列したのは、正しく朝鮮慶州皇龍寺、我邦の四天王寺、山田寺等の伽藍様式と符節を合するものではないか。世或は之を百濟式配置と名けるものもあるが、それは百濟に特別なる様式でもなんでもなく、實は支那北魏式、六朝式なのである。



第三圖 洛陽永寧寺平面略圖

註八。佛寺のみならず、一般に東面を常とすることは印度の習俗である。達嚨 (Dakshina) という字が、右手であると共に南方を意味し、それから轉訛して南方印度の高原を Deccan と呼ぶに至つたことは、皆人の知る所である。大日經疏 (開七ノ四八)「西方俗法。東向而治。故以<sup>二</sup>東方<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>初方<sup>一</sup>。南爲<sup>二</sup>右方<sup>一</sup>。西爲<sup>二</sup>後方<sup>一</sup>。北爲<sup>二</sup>勝方<sup>一</sup>。」西域記 (一)「三主 (南象主、西寶主、北馬主) 之俗。東方爲<sup>二</sup>上<sup>一</sup>。其居室則東開<sup>二</sup>其戸<sup>一</sup>。且日則東向以拜。人主 (東) 之地。南面爲<sup>二</sup>尊<sup>一</sup>。」佛寺東面は西域記に幾多の例がある。健陀羅の遺蹟にも東面のものが多い。佛陀伽耶の大菩提寺、更に飛んで爪哇のボロブヅル、皆東面である。著しい除外例はサンチ大塔の南面である。中亚諸國の例は區々にして一律に言ひ難い。

更にこゝに最も興味多く感ぜられることは、塔の北なる佛殿を「形太極殿の如し」と簡單明瞭に説明して居ることである。いふまでもなく太極殿は宮城の正殿で、國家の大禮を擧ぐる所、漢の未央前殿に當るもので、魏の青龍三年始めて造り三國魏志三晉より以降、正殿は皆此名を以て呼ばれ初學記二四唐に至つて含元殿が之に代つた唐に太極殿はあるが第二二位に落ちたものである。一個の佛殿がこのもの／＼しい國家正朝の殿堂に似て居るといふことは、如何にそれが輪奐の美を極めた典刑的な支那建築であつたかを知るに足ると共に、又宮殿と佛寺とに特別な建築様式なく、兩者全く共通のものであつたことを確證するものであらう。茲に端なくも想ひ起すは、我が天平十八年九月恭仁宮の太極殿を國分寺に施入せられた記事續日本紀で、多分現存の金堂址がそれに當るものであらう。或は平城京の朝集堂が、直に唐招提寺の講堂となり得るのも同じ理由からである。今傳らない支那の太極殿の形は、日本の文獻によつて十分想像されが、又法隆、唐招提等の金堂から一層具體的に其輪廓を思ひ浮べ得るのである。

更に伽藍記の記事は、寺院の牆を「今の宮牆の若し」といひ、三重の南門を「今の端門殿の正門。左右掖門に對していふに似たり」といふなど、總て之を宮殿の形式に比較して居る。佛寺もこゝに至れば、一個魏魏たる支那の宮殿であり、かの世間の王者の住宅に對して、これは正しく法王の居城である。佛寺の形式は全く竺乾西域のものゝ絶縁して、結局は終始一貫して發達し來れる支那獨自の建築様式の一部的變形に過ぎないものとなつた。之を支那佛寺建築の第二期とする。而して此宮殿式佛寺建築が朝鮮を通じて我邦の飛鳥建築と現はれ來つた

ことは、歴史の常識である。

思へばバジリカは羅馬の法庭であり、市民の會所であつたが、やがて地下の暗黒から地上に現はれ出た耶蘇教徒に採用され、遂に彼の莊麗なロマネスク、ゴシックの教會建築とまで發達した。支那の場合では、それが王者の宮殿であつた。耶蘇教の場合と異り、佛法の源泉たる西域諸國には儼然たる佛寺の標本があるに拘らず、それは顧みられないで——尤も石窟寺の如き西域風の直寫も一時的、地方的には行はれて居るが——支那固有の宮殿と融合し、極東に特殊な佛寺の形式を出現した。更にそれが發展して唐式伽藍となつて、此様式は益完成せられるのであるが、この過程を論ずることは、最早や主題たる「原始形式」の範圍を越ゆるものであり、且つ考察の材料となるものとても、大方は世間に知れ渡つたものゝみであるから、今は茲に筆を擱く。

附記。本稿の要領は大正十四年六月、東大、文學部美術史談話會で語つたものである。其際の手記を管底に見つけ、補訂を加へて草したる。

因云、余は屢々西域の例を比較に出したが、之に就ては前世紀末以來の印度の考古調査の報告を通覽する自由を缺き、又現今中亞諸國に存する遺蹟は、年代の明示せられるものが少いから、多くそれに言及することを避けて、概略の論旨を通すに必要な範圍にのみ止めた。

(昭和八、三、廿七)

挿圖出所

第一圖 Cunningham, Archaeological Survey of India, V. Pl. XX 以下

第二圖 Stein, Ancient Khotan, II. Pl. XI 以下